

岩佐吉純先輩の思い出

横井政人

昭和26年卒業の岩佐さんはクラスとしては昭和29年卒業の私より3年違いますが、年齢は同じ昭和6年（1931年）に生まれています。この違いは、岩佐さんは2月の早生まれ、私は4月の遅生まれのため、普通でも1年違うこととなります。ちょうどこの時戦後の大学改革で新制大学になりましたが、故人は新制大学1年には入らず旧制専門学校のまま卒業。したがって岩佐さんのクラスで新制大学（1年）に再入学した学生は故人より1年遅れ、私と同じ遅生まれの学生は新制2年目のクラスに入学して3年の差がでてしまいました。年齢が同じでもクラスが違えば同級生とは思えず、先輩というようになってしまいました。

松戸にて

私が岩佐さんと知り合うようになったのは、新制大学2年の稲毛での教養学部の時でした。月1回の農業実習が松戸の園芸学部であり、この時に初めて花卉実習のご指導を受けたのです。専門課程の3年になってからは毎週1回の花卉実習がありましたので、浅山先生と岩佐故人に頻繁にお会いしました。3年後期から4年の専門課程になると、岩佐さんからは穂坂教授と共に、専門実習および卒業論文のご指導を専門的に、直接受けるようになりました。

昭和27、28年頃は花卉の農場が特に美しい時でした。浅山先生や岩佐故人が、当時毎日ある学生実習の指導に専念され、広い見本園を作り、多くの草花を植えていました。故人は球根類を好まれ、特にダリアやグラジオラスの品種をたくさん植えていました。浅山先生は宿根草がお好きで、特にソライロサルビアは印象的でした。さらにツバキ、フジ、ボタン、カエデなどの品種見本園、また当時では大きな熱帯温室（修理現存）があり、これらの手入れの学生実習も大変だったでしょう。特にツルバラが咲く時期は多くの見学者が見え、松戸名物になりました。残念なことに、まだこの頃は写真機はプロカ裕福な人でないと買えず、作業中の先生方や植物の写真がほとんど撮られていません。私の同級生に1台しかなかった状態ですから。

岩佐さんのその他の大事なお仕事の1つは、促成球根の温度処理の研究でした。温度や処理期間を複雑に組み合わせ球根に処理し、冬の切花品質を調べるといふ、夏から冬にかかる長期間のお仕事でした。材料はチューリップを中心に、ユリ、球根アイリス、スイセンでした。

2つ目のお仕事はストックの育種研究で、温室ストックの交配を多数の組み合わせで行い、花色、花穂など切花品質の調査でした。この頃は照葉ストックが出始めた頃で、香りのよさが人気を呼んでいました。

球根は穂坂先生、ストックは浅山先生の中心のテーマでしたが、これらの研究調査のため岩佐さんは正月休み返上でお仕事されていて、はた目でみても大変で、お休みはいつとるのかと思っていました。

農場に長くて太い煙突があり、その元に球根温度処理用の大型地下冷蔵庫があり、岩佐さんが夏初めから深い階段を降りたり、上がったたりして、ここにある4室（だったか）の冷蔵庫に球根類を出し入れされておりましたが、そのお姿が今だに忘れられません。このような先輩が農場で作業する写真も一枚もないのは、なんといっても惜しいことです。

私は4年後期の卒業論文にはグラジオラスの灌水試験を行いました。京都大学の大学院受験のためうまく手入れができず、岩佐さんには大変お世話になり、恥ずかしい思いをしたことを今でもよく覚えています。しかし故人はいつも明るく対応してくださり、私個人、本当に感謝しておりました。

先輩の後任に

私は千葉大卒業後、京都大学大学院修士課程に進学しましたが、2年後の修士課程修了間近に突然、岩佐さんから、春に坂田種苗に移るので後任の話があるがどうかと、内々の打診を受けました。初めは岩佐先輩の後任が私に務まるかと半信半疑でお断りしようと思いましたが、京大の主任教授塚本先生がこのようなチャンスはめったになく、りっぱな先生がおられる場所で勤めながら勉強すればよいのではないかと、是非希望しなさいといわれ、それではとご返事しました。

故人からはまた、「これからは新しい勉強をした若い人が必要なので是非にと」といわれ、それでは勉強させていただきますと、私は母校に戻ることにしました。今思えば、私にとって岩佐先輩がおられなかったら今の私はないわけで、人生のチャンスとは分からないものと思いました。

岩佐先輩の自叙伝は「花葉」にまだ書かれておりませんので、故人の結婚前の若い頃の情報はほとんどありません。京都から松戸に戻った私に、先輩が時々いった言葉は、「私は商業学校出身なので、そろばんは得意でタネやのほうに向いていると思う」で、今でも印象的に覚えております。どなたがみても、その後のご活躍からご名前で、先見の明があったと思っております。

岩佐先輩の後任になった私は案の定、苦労しました。故人がやっていたように、農場管理、実習、実験、研究とやらなければならず、とうてい教授、助教授の希望通りにはいきませんでした。

今さらいうのは恥ずかしいことですが、3年目頃には、今いうストレスからくるノイローゼとなったようです。これでは大学を辞めなければならないかと真剣に考えました。幸いかどうか私の義兄の占い師（今でも時にテレビ出演する横井伯典）にみてもらうと、ゆっくりではあるがだんだんよくなる運勢であるといわれました。そこでこの所見を信じ、また岩佐先輩のやられたように改めて努力しよう発奮いたしました。この頃でも物事を器用に、手早くこなす先輩をみていて、その偉大さに感服しておりました。私はまだまだ小さいとつくづく考え直し、その後、徐々に、仕事ができるようになりました。

その後、坂田種苗株式会社に移動されてからは、しばらく接触が減りました。種苗会社の難しいお仕事の勉強のため、大学の頃以上にお忙しくなり、種苗一途のお仕事だったためと思います。そしてりっぱな経済人になりました。

時々お会いすると、グルメになった岩佐先輩からはご馳走をいただくことも多く、時に先輩が私に文句をいわれることがありました。それは「お前は味音痴で、何を食べても味がわからない」ということです。そこで私は「腹が減っていればどんなものでもおいしい。戦争のときを考えれば」といい返すこともありました。それでは、話にならないということでした。

ただ先輩から、通風が持病であると聞かされるようになった時から、常識的にはぜいたく病ではないかと思うことがあり、グルメではない私とは違うのかなと考えることがありました。

ダリアと洋古書

岩佐先輩のことを語るなら、なんといってもダリアと洋古書でしょう。ダリアは学校の松戸時代からのお好みで、文献はもちろん、ダリアについてのすべての収集です。ダリアの文献はほとんどすべて集められたそうです。ただ英国のダリア小図書を2冊さしあげた時は喜ばれました。岩佐さん自身はインターネット検索をやらないので、インターネットのデータはかなりさしあげました。ダリアの世界の品種リスト、文献リスト、分類データ、標本写真などです。

私がダリアの野生を初めて見たのは、飯塚宗夫教授等と、文部省科学研究費により、中南米を1975年、1978年と長期にわたり園芸植物視察旅行をした時でした。これ以後、岩佐さんとダリアについて多くのお話し、資料提供もしました。先輩もぜひメキシコへダリア視察に行きたいと、常日頃おっしゃっていました。また英国のダリアナショナルコレクション農園は近いうちに行かれるご予定とも聞いておりました。これらのチャンスをなくし、さぞご無念だったことでしょう。

岩佐先輩と私との最後の仕事は、「ニュージーランドでのダリア花形問題」の翻訳になりました。1週間で頼むと急がれ、この内容は日本ダリア会会報平成18年2号に掲載しました。日本では理解しにくい問題ですが。

ダリア以外の古典園芸洋書収集はさらに有名です。何回か岩佐宅を訪れ、利用させていただきました。また何冊か貴重な古書をいただきました。例えば、英国へ導入された植物の年代が詳しい1868年発行の「Paxton's Botanical Dictionary」です。

収集し始めた頃、先輩が私達にいていましたが、理想は、収集古書を一般公開することでした。ただ集めだしたら無限に近くなってしまい、多すぎて公開できなくなってしまったのが実情でしょう。貴重書の飛散がないような保存を切に希望いたします。

最後に先輩自身の健康管理のことをひとこと。先輩はお忙しかつたので時間がなく、ご自分の検査ができなかったといわれました。でも、人間ドックの一度ぐらいはと思うと、かえすがえすも残念です。通風の痛さはお聞きしましたが、ガンについてはまったくありませんでした。しかし、私に「最近10キロもやせておかしいと思うが」といわれましたので、「病院は？」と、お話をしました。その後、1ヶ月もたたないうちに入院となってしまいました。

お元氣な先輩を想うと、短期間のうちに故人になられるとは想像もつきませんでした。心からご冥福をお祈りいたします。